



- 1 開催日 令和2年9月23日(水)
- 2 開会及び
閉会の時刻 午前10時00分開会 午前12時00分閉会
- 3 開催場所 仙台市役所教育局第1会議室
- 4 出席委員氏名 阿部哲也委員, 小形美樹委員, 加茂光孝委員, 齊藤康則委員,
庄司弘美委員, 佐藤智子委員, 高城みさ委員, 高橋満委員,
高山典子委員, 野原昌之委員, 広瀬剛史委員, 松山智美委員
- 5 事務局職員 筒井生涯学習部長, 佐藤生涯学習支援センター長,
田中生涯学習課長, 勢藤生涯学習課主幹, 唐牛生涯学習課企画係長,
生涯学習課企画係松田主事
- 6 会議の次第
 - (1) 開会
 - (2) 挨拶 高橋委員長
 - (3) 報告事項
 - ① 「(仮称) 仙台市教育プラン」骨子案について
 - (4) 協議事項
 - ① 調査進捗報告
 - ② 今後の議論の進め方について
 - ③ その他
 - (5) その他
 - (6) 閉会
- 7 会議の概要
 - (1) 報告事項
 - ① 「(仮称) 仙台市教育プラン」骨子案について
○事務局より、「(仮称) 仙台市教育プラン」骨子案について説明がなされた。事務局から、中間案へ向けて社会教育委員の会議の意見も盛り込みながら生涯学習分野に関してもっと書き込んでいく必要がある旨も併せて報告し、進捗報告していくことになった。
 - (2) 協議事項
 - ① 調査進捗報告
○8月末から9月上旬で行われた、訪問調査について各委員より報告がなされた。
○調査については、7月の定例会で決めた2つの視点のグループ(「障害のある市民の生涯学習について」「貧困のなかにある人びとの生涯学習について」)に別れて対応した。

- 「障害のある市民の生涯学習について」のメンバーは加茂委員、齊藤委員、庄司委員、高城委員、高橋委員長、高山委員の6名で取りまとめ役は庄司委員。
- 「貧困のなかにある人びとの生涯学習について」のメンバーは、阿部委員、小形副委員長、佐藤委員、野原委員、広瀬委員、松本委員、松山委員の7名で取りまとめ役は阿部委員。
- 調査団体は以下の8団体
 - ・社会福祉法人仙台市障害者福祉協会
 - ・仙台市鶴谷特別支援学校
 - ・社会福祉法人太陽の丘福祉会 仙台ローズガーデン
 - ・公益社団法人 東北障がい者芸術支援機構
 - ・NPO 法人エイブル・アート・ジャパン
 - ・NPO 法人アスイク
 - ・特定非営利活動法人まなびのたねネットワーク
 - ・特定非営利活動法人 STORIA

- 調査にて課題・意見として挙げられたことは以下のとおり

【障害のある市民の生涯学習について】

- ・イベント参加者が子どもと高齢者で二極化している。中間層の参加が少ないという現状がある。
- ・イベントを企画する職員の能力の差によって取組内容に違いが出てしまう。
- ・就労後は、家と職場の往復だけになっており、余暇活動を十分に行えていないのではないか。
- ・余暇を過ごす場所が認知されていないのではないか。
- ・支援学校に通っているうちから、卒業後も余暇活動を継続できる団体を保護者と情報共有し、保護者の横のつながりも絡めていけば、卒業後の余暇活動が出来る団体への移行がスムーズになるのではないか。
- ・活動の際に、講師だけでなく、子ども生徒の障害を理解し、寄り添って手助けしてくれるような人がいればスムーズなのではないか。
- ・施設の職員向けに芸術関連のワークショップを開催している調査先から、施設職員向けのワークショップに参加者が少ないとの意見があった。職員の人出不足、また、芸術分野が余暇とされるため重要な研修になりづらく職員の参加が難しいのではないかとこの事であった。
- ・障害の有無に関わらず「みんなで集まれる場」をつくれれば良いのではないか。
- ・障害のある方が安心して活動するためには、交通の便・トイレ・階段等の設備面での安心感が重要なのではないか。
- ・余暇活動について、積極的な方は自分からアクセスできるが、そういった方ばかりではない。チラシ配布等行政と連携し情報発信できればいいのではないか。

【貧困のなかにある人びとの生涯学習について】

- ・高校生以上になると支援が少なくなるので、例えば高校を中退した子の居場所をつくる事業など、フォローの体制を整える必要があるのではないか。
- ・オンラインでの学習であれば参加しやすいのではないか。
- ・市民センターの活用として、実利的な講座があれば参加するのではないか。
- ・それぞれの家庭の事情に合わせて、その家庭の不足するところをサポートする関係を豊富に作り、人でしかできない部分のアプローチが必要なのではないか。
- ・民間団体の取り組みを行政が後方から支援できれば良いのではないか。

- ・キャリア教育で主体的な人材を育てることで、結果的に大人の育成にもつながり、貧困連鎖を断ち切る予防教育になるのではないか。
- ・非認知能力（共感力、企画力など学校や教科書で学べないこと）を育むことが「生きる力」につながるのではないか。
- ・地域と共存・連携し居場所をつくること、いろいろな方と関わる場が大切なのではないか。
- ・仕事と直結するキャリア形成、仕事をする上での学びのサポートも生涯学習の一つの在り方なのではないか。
- ・市民センターとの連携について情報共有だけでなく、市民センターと民間団体の共同研修などでスキルアップしていければ良いのではないか。

○各グループリーダーより、まとめとして述べられたことは以下のとおり

【障害のある市民の生涯学習について】

- ・就労すると、余暇活動的な生涯学習活動が難しくなるという声が多く聞かれた。
- ・利用者同士の会話も楽しみの一部として、生涯学習につながる場所があるのではないかと感じた。
- ・障害のある方の生涯学習活動について、それぞれの家庭環境や施設設備の面から難しい面もあると感じ、生涯学習の施策がより重要になると感じた。

【貧困のなかにある人びとの生涯学習について】

- ・仕事につながる、もしくは収入につながるような学びや講座などの方が、関心があるのではないか。
- ・社会教育施設や市民センターが、居場所として集まれる場所になれるかどうかが大変なポイントなのではないか。
- ・情報の発信の仕方を工夫し、そこに行けば何ができるのか、もしくは何を受けられるのかという事をアピールしたような見せ方も必要なのではないか。

②今後の議論の進め方について

○全体での意見交換を行い、今後の施策の柱建ての方向性について委員長よりお話いただいた。

○以下は委員から述べられた意見交換の内容

- ・「障害のある市民の生涯学習」グループの方が色々な取り組みがあるという印象を受けたが効果・成果がある団体はなぜうまくいっているのか分かれば教えていただきたい。
→うまくいっている方もいるが、やはり一部の方に限られている。まだ参加できていない方にどのようにアウトリーチしていくかが重要になると考えている。
- ・学校現場だと、実際の貧困は見えにくく「心の貧困」の方が課題として大きいと感じる。
- ・「障害のある市民の生涯学習について」は、若い世代や不参加層への裾野をどう広げるか、取り組みをどう持続可能なものにしていくかが課題と感じる。
参加の場をどう作り、どんな人がサポートしていくのかを議論していくのが良いのではないか。
- ・「貧困のなかにある人びとの生涯学習について」は、そもそもの生涯学習への関心をどう広げていくか、誰に広げるかが課題と感じる。
支援者の支援や、保護者の支援がひとつの取掛かりになるのではないか。

③その他

○委員長より、会議日程の前倒し開催の提案がなされ、次回会議は11月24日（火）に開催することとした。

8 その他
特になし

「仙台市社会教育委員の会議実施要領」第4条及び第5条に基づき会議録を作成し、同要領第6条に基づき委員長及び会議録署名人が署名押印する。

令和 2年 11月 9日

委員長

高橋 満

会議録署名人

佐藤 智子